

# 医心 伝心

## デジタル化時代に思うこと

富山県医師会理事 原 拓央

医療 DX という言葉をしばしば耳にするようになり、現場でも様々な変化を求められるようになりました。そう遠くない将来にリモート診療や AI による診断支援などが普通になってゆくのでしょうか。一方、かつての「当たり前」が時代の波に淘汰されて次第に姿を消していく様子も数え上げればきりがありません。デジタル化によって見かけなくなった少々懐かしいものを振り返りながら、昨今の事情について愚考してみました。

インターネットやスマートフォンが行渡ることによって我々の日常は大きく変貌しました。従来は新聞や電話帳、時刻表などの「印刷物」が生活に欠かせない必需品でした。文献も然り。ページをめくりながら実は目的以外の様々な情報も手にしていたように思います（近年の個人情報云々からは信じがたい部分も含めて）。現在のようにピンポイントの検索が一瞬で行えるようになったのは大変便利なのですが、時には遠回りで非効率なアナログ特有の情報収集のあり方が失われてゆくことに若干の危惧を感じています。

地図もナビゲーションシステムの進化により見かけなくなりました（現在も様々な趣向を凝らしたものはあるのですが…）。今ではナビがリアルタイムで案内をしてくれますが、使い込まれた紙の地図には愛着がありました。行程を決めるときには相応に頭も使いまして、地図を片手に右往左往したことや思わぬ光景に遭遇したことは長年経っても忘れられないものです。デジタル技

術の鮮烈さには驚かされることが多いですが、いつまでも記憶に残るような機会が減った気がするのは、思考を巡らす必要がなくなったことも無関係でないように思います。

私の専門である消化器外科の分野でもここ20年程の変化は顕著です。支援ロボットの普及や鏡視下技術の進歩により、手術の精度や安全性が飛躍的に向上したように感じます。いわゆる低侵襲手術によって患者さんの負担は軽減し、術後の回復も迅速になりました。患者さんのメリットはもちろん大切ですが、外科医の成長過程が劇的に変わったことも重要な点だと思っています。直達手術の時代のように「目で盗む」必要はなくなり、術者目線の動画を何度でも繰り返し見ることができるようになりました。上級者に指導を仰ぐことも容易になり、達人と呼ばれる外科医の映像も手に入ります。意欲ある若者たちが我々の時代では考えられない速度で知識や技術を習得してゆくのを目の当たりにすると、これには嬉しさとともに羨ましさを覚えます。

デジタル化の進展は私たちの生活や医療を大きく変え、多くの利便性を提供してくれるようになりました。しかし臨床検査がどれほど精密になっても患者さんを直に視て直に触れることにはかなわない面があるように、アナログ時代の「良さ」も再認識させられます。未来に向けて新しい技術を活用しそれに感謝しつつも、過去の良さを大切にするバランスを上手く持ち続けたいものです。